【教育目標　夢中になる　ともに創る】

きらきら

新潟市立沼垂幼稚園
園だより
令和6年3月15日発行

一人一人の成長とその子が自ら放つ輝き

園長　青木博子

今日は，少し大きな話から入ります。

日本では，すべての子どもたちに同じ水準の教育を保障するために，様々な教育が展開され，丁寧な指導が行われ，子どもたちの力を育んできました。一方で，「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなること，「みんなと同じことを同じように」することが過度に求められることも挙げられました。

今，その課題から，「すべての子どもを自立した学習者に育てる」ことを目指す教育が展開されています。そこでは，子どもたちの個性を大切にして，一人一人の興味や関心に応じた学習を行うことも，国全体で取り組んでいます。その子に合った学習をしようと，「個別最適な学び」という言葉も使われるようになりました。

私は，そのことを頭では分かっていても，まだ全体への一律の指導，言い換えれば，全ての子どもたちに同じことを求めてしまう画一的な教育から抜け出せずにいました。私は，ここ沼垂幼稚園に来て，この園での子どもたちの様子を見ながら，何度も自分の古い教育観に気付かされ，それを問い直すことがありました。

そして，先週行われた修了式の練習の中でも，私は大きな衝撃を受けました。これまで，私は小学校勤務時に，何度も卒業式に向けて指導をしてきました。卒業式の意義を伝えた後，返事の仕方や歩き方を子どもたちに丹念に教えてきました。例えば，歩き方は，歩幅から指先の伸ばし方までを揃えて堂々と。返事は会場全体に響くようにと。みんながきちんと揃うことが良いことだと信じてきたのです。

しかし，目の前の年長児たちは違いました。返事は一人一人違います。大きな声を出す子どももいれば，はきはきと滑舌良く声を出す子どももいます。淡く優しい子どもの声も，しっかりと聞こえます。いつも以上に力を込めて一生懸命に声を出しているのが分かりました。どの子どもの表情からも「わたしはわたし」である自信が伝わってきました。

さらに，お姫様が歩くように，揺れるように歩く子どもがいました。足が上がって，スキップしているように見える子どもがいました。もう歩い出すのではないかと思うほど，満面の笑顔で歩く子どももいました。きりっと歩く子どももいました。

歌声も歌い方も，一人一人違いました。でも，その歌声の中から，これが誰の声なのか分かるような気がしました。歌いたくて歌っている私の声を，ぼくの声を聞いてって言う声が聞こえてきたのです。

子どもたちみんなが，一生懸命に，そしてありのままの自分で振る舞う姿の中に，子どもたち一人一人の個性がきらきらと輝いていました。自らが放つそれぞれの輝きに満ちあふれていました。みんな違うのに，みんなの頑張ろうとする意欲が伝わってきて，１つの大きなまとまりとなっていました。文章で表すのは，とても難しいのですが,「かけがえのない一人一人の個が，際だっている」様子に，本当に心が揺さぶられました。そして，担任の先生と次の練習の打合せをしましたが，担任の先生と私は，もう十分に素晴らしいという意見で一致したのです。

その日の放課後，年長児と担任の先生の様子を見守ってきた先生に,「どうすればあのような子どもたちの姿が見られるのですか」と尋ねました。すると即座に,「あの先生は，決して『ダメ出し』をしないのです。良い姿をとにかく褒め続けていました」との返事がありました。

子どもたちが一生懸命に取り組もうとしていることに,「ダメ出し」をしない。一方的に大人の価値観を押し付けずに，子どもたち一人一人の頑張りを認め，受け入れる。それはあまりに当たり前のようで，とても難しいことですね。それによって，子どもたちが安心して，自分らしさを発揮できることを改めて教えてもらいました。

もうすぐ修了式。子どもたちは，どのように「成長している自分」を表現してくれるのでしょうか。一人一人が「自分らしくある」姿を，今から私は楽しみにしています。

きっと私の思い描く姿のはるか上を超えていく子どもたちに，また出会えるはずです。